

日本情報科教育学会 第8回全国大会（山口大会）

第8回全国大会実行委員長 鷹岡 亮（山口大学）

1. はじめに

第8回全国大会を「情報科教育で育成すべき能力の再考」というテーマのもとで、平成27年6月27日、28日の2日間、山口大学吉田キャンパスにて開催させて頂きました。中国地区では初めての全国大会の開催であり、9社の企業さまからの展示・広告、文部科学省、経済産業省、総務省をはじめ6団体からのご後援、関係学会・研究会・協会・財団等9団体からのご協賛を頂きました。

第8回大会の参加者数は、2日間で131名でした。また、初日午後のプログラムを山口県の学校教員及び学生の研修会として開催させて頂いた取組みには、36名（学校教員：24名、学生：12名）にご参加頂きました。プログラムとしましては、基調講演1件、招待講演2件、トピック別トーク



& ディスカッションで3分科会、パネルディスカッションにおける話題提供4件、口頭発表52件、ポスター・デモンストレーション発表12件（ポスター発表：7件、デモ発表：5件）のご登壇を頂きました。

2. 大会の基本方針と特色

次期学習指導要領の検討が本格的に始まり、今回の改訂では「何を教えるか？」だけでなく「どのように学ぶか？」「どのような力が身に付いたか？」といった観点からの検討がキーポイントになっています。さらに、新しい学びに対応した教材や評価手法の開発や普及を図っていくための支

援方法の在り方も重要視されています。このような動向のなかで、情報科教育に関して、新しい時代に必要な教育内容とともに学習・指導方法、学習評価の検討を急ピッチで進めることが必要ではないかと考え、維新の地「山口」において、新しい時代における情報科教育の在り方を再考する契機として「情報科教育で育成すべき能力の再考」というテーマ設定をしました。同時に、前回大会の方針を継承し、地域において情報科教育を推進するための考え方や方策について、参加者に情報提供を行うとともに、参加者間及び連携可能な様々なステークホルダーとの意見交換が図れる大会運営を行うことを目指しました。

具体的には、次期学習指導要領へのキックオフとして、意見交換が可能な多くの場を提供し、次期学習指導要領に向けて検討（解決）すべき課題を抽出・共有できるプログラム構成を行いました。初日の基調講演・招待講演の後に、情報科教育のコンピテンシー、地域における情報モラル教育の展開の在り方、情報科教育の授業の在り方についてご議論頂き、そこでの課題意識等を懇親会や湯田温泉で熟議して頂こうと計画しました。そして、2日目の発表やパネルディスカッションを通して、これから検討すべき課題を整理して、参加者で共有ができればと考えた次第です。



3. 大会の様子

初日（1日目）は、4つの口頭セッションから

スタートとなりました。開催校を代表して古賀和利理事副学長にご挨拶頂いた後、岡本敏雄会長に「高度情報化時代の教育の様相～ITで10年後の学校教育はどう変わるか～」と題して基調講演を行って頂きました。講演では、情報科教育、情報教育、教育の情報化が三位一体の関係ではあるが混同されていること、新たな時代において情報科が果たす役割は極めて大きく、教科「情報」の立ち位置を日本人にとっての「新しい学力」の中身との関係に基づいて明確にすることは重要で、本学会は、今一度、諸外国の状況を踏まえながら教科「情報」のコアを議論し、コアカリキュラムを開発・提案することが求められているとご指摘頂き、大会期間中の論点をご提供頂きました。



基調講演に引き続き、2つの招待講演が行われました。最初に、文部科学省の新津勝二情報教育振興室長から「教育の情報化の動向」という題目でご講演頂きました。講演では、ICTを活用した学びの推進に関わる政府方針から、教育の情報化の現状、さらに文部科学省の取り組みについてお話頂きました。特に、学習指導要領の改訂、高大接続改革の部分を重点的にご説明頂きました。情報科に関しては、指導内容の充実と新テストへの検討が同時に行われているという状況を踏まえて、ハード面、ソフト面の課題について早急に克服し、また情報専任教員の養成・採用・研修についても力をいれていくことが必要であるという強いメッセージを頂きました。

続いて、国立教育政策研究所の白水始総括研究官から「21世紀に求められる資質・能力と情報科教育」というタイトルでご講演頂きました。「今後、児童生徒の情報活用能力のどのあたりを伸ばしていくべきなのか？」という問いを情報活用能力調査の結果を踏まえながら分かりやすくお話頂きました。はじめに、21世紀型の授業を「すべての学習者が直面する課題に豊富な情報を使って深

く考え未来を創る一員になっていく授業であること」と定義され、「これらの授業において情



報に関わる能力と情報科教育が貢献できるのではないかと」と参加者に問いが投げかけられました。その後、Open informational worldのなかで情報活用能力を超えて重要となる「情報をまとめる力（情報統合能力）」について、Fast thinking, Slow thinking, トランスリテラシー等のキーワードを出しながら、日本の児童生徒は情報を整理・分析するフェーズに弱点があることなどのお話を通して、多種多様で断片的な情報を統合して知識を作り上げていくリテラシーを獲得することの重要性をご説明頂きました。次に、次期学習指導要領のキーとなるアクティブラーニングとICTについて、途中、聴講者が中学2年理科の授業デザインを検討する活動をいれて頂きながら、「前向き授業（＝アクティブラーニング）」においてICTを活用した変容的評価の意義や、学びの変遷をICTで可視化することの意味、児童生徒が主体的に社会とつながりながら学んでいくために学び方に対して自覚的になることの重要性、さらに、利用するICTの使いやすさやカスタマイズを探究できる小中高の教科構造の必要性など多岐にわたるお話を頂きました。最後に、Slow ThinkingするためのツールとしてICTを活用するなど各教科のすべての土台として情報の方法知を学び（横軸）、科学的な理解や社会参画・態度などの内容知を充実させていく（縦軸）逆L字型モデルを示され、特に、情報科教育（内部構造、セキュリティ等）の中身を問題解決と結び付けて提供し、「賢いユーザかつユーザ中心の技術的な中間層」を厚く育む教科体系を構想できればよいのではないかとのご提案を頂きました。

初日の最後のセッションは、トピック別のトーク&ディスカッション（分科会）を3つのテーマ

で実施しました。「情報科教育で育成するコンピテンシーと達成度テスト」では、情報科教育においてどのような資質・能力を育成すべきなのか？その資質・能力の中身を明らかにすること、そしてどのように評価するのか？といった観点からの2件の発表の後、思考・判断・表現の評価の細分化と情動的な見方・考え方、情報科の授業、ICT活用と学力や指導との関係、新しいテストによる評価などの意見交換が行われました。「地域において情報科教育・教育の情報化を推進するための方策～情報モラル教育の今後の展開を中心に～」では、最初に話題提供があり、その後、「携帯電話・スマートフォン・インターネット・SNSの利用上に関するルールづくり」について激論が交わされました。3つめの「情報科教育の授業の在り方を考える～情報科教育の内容や担当者の課題意識を中心に～」では、情報科の教育実践者による授業そのものを対象にした議論の場を設定すべく、情報科教育の授業に対する担当者の課題意識を語り合う分科会を設定しました。この分科会では、3人の先生の授業に対する考え方や課題意識を発表頂いた後、情報科に期待されている学びとは、ICTの学校整備、教員の指導力向上についての3つの問題について、フロアからの質問や意見を交えた議論が展開されました。

2日目の午前中は口頭発表が行われ、昼休みをはさんで、さらに口頭発表とデモンストレーション発表が行われました。特に、デモンストレーション発表には多くのご参加を頂き、会場内では熱い議論が交わされていました。その後、ポスター発表が行われました。

大会最後のプログラムとして、パネルディスカッション「情報科教育で育成すべき能力、教育内容、学習・指導方法、学習評価」を実施しました。このパネル討論は、大会2日間の論点をまとめる



セッションでもあり、また次期学習指導要領へのキックオフとして、今後検討・探究しな

ければならない情報科教育の課題を各聴講者が考え、共有する場として位置づけました。パネリストには、松田稔樹先生、佐藤万寿美先生、池田勇先生、村松祐子様のご登壇頂きました。パネリストの発表の後、指定討論者である岡本会長から「情報科教育と情報教育との違いも含めて情報科教育で育成すべき能力として何が期待されているのか？他の教科にない情報科教育の学力とは何か？」について質問がなされ、パネリストだけでなくフロアも含めて意見が交わされました。このなかで、「課題解決を通して、情報処理を仕組みや原理を理解した上で納得できる、大量のデータを読み取って活かすことができる人材を育成するのが情報科教育の役割ではないか」、「情報が一番上位の問題解決の枠組みであって下位に数学的方法論や科学的方法論などがあってそれらをコントロールして使うような総合的な能力に結び付けていくのが情報科教育として行うべきことではないか」、「どのレベルまでの情動的な見方・考え方を求めるのか」、「コンピュータやネットワークに関する知識・理解についての力をつけるのが情報科の具体的な学力につながる基本的な部分ではないか」、「情報を意識することによって、その裏側の仕組みも知りたくなるのではないかと考えると『意識すること』もコンピテンシーの1つになり得るのではないか」などの意見が示されました。

4. おわりに

限られた時間のなかでは、十分に課題抽出や共有が行えず、課題解決の見通しが持てるレベルにはほど遠い状況であったかもしれませんが、本大会での取り組みが契機となって、参加者の研究や実践が1年後の全国大会、さらに次の大会において成果という名の花を咲かせて頂ければと願っております。

最後になりますが、大会準備・大会期間を通して、ご支援・ご協力頂きました皆さまに深くお礼申し上げます。ありがとうございました。